

国際漁業学会 (JIFRS) 短信

<http://www.jifrs.info/>

事務局 〒631-8505 奈良市中町 3327-204 近畿大学農学部内

Tel : 0742-43-6021 Fax : 074243-6021 E-mail: jifrs.kindai@gmail.com

郵便振替番号 : 00100-6-26448 国際漁業研究会

三菱東京UFJ銀行富雄(トミオ)出張所 普通口座 3698979 国際漁業研究会

2014年度第2号

2014年10月15日刊

目次

- | | |
|--|--------|
| 1. 理事あいさつ「フィリピンからの便り」 | 綿貫 尚彦 |
| 2. 2014年度 JIFRS YAMAMOTO PRIZE の選考過程と
受賞者について | 多田 稔 |
| 3. IIFET2014 オーストラリア大会参加体験記 | 藤本 麻里子 |
| 4. 2014年度国際漁業学会大会に参加して
事務局便り | 小川 健 |

1. フィリピンからの便り

綿貫 尚彦 (国際漁業学会理事・OAFIC)

フィリピンのレイテ島でこれを書いています。当地で2013年11月に発生した台風30号(フィリピン名:ヨランダ)は地域の重要な産業である水産業に壊滅的な被害をもたらしました。漁船や養殖生簀が大きなダメージを受け、漁村の人々は生活手段を失いました。台風は毎年のようにフィリピンへ来襲するので、災害に強い水産業をつくるための支援活動を行っています。他ドナー・NGOは漁船や現金の配布といった援助にとどまっていますが、日本は浮沈式生簀を用いたミルクフィッシュ養殖や水産試験場の復旧といった「オンリーワン」の活動を展開しています。東日本大震災のとき、世界中の人に助けられたので、その恩返しという思いもあります。

レイテ島は太平洋戦争の激戦地として知られていますが、反日感情を感じたことはありません。フィリピンの方々が日本に友好的な理由の一つは、日本による様々な技術協力や無償資金協力ではないかと思われまます。東南アジア漁業開発センター(SEAFDEC)との協力は有名ですし、養殖の最先端をいくダグパンの国立総合水産技術開発センター(NIFTDC)を作ったのは日本です。漁業調査船の建造や毒性赤潮モニタリングに関する協力も行われてきました。フィリピンの水産業は日本とともに歩んできたと言っても過言ではないでしょう。

話は変わりますが、私はフィリピンで国際協力の世界に入り、途上国を転々とする生活をかれこれ 20 年ぐらい続けています。学者でも研究者でもない私が JIFRS や IIFET に入った理由は、新しい発見や気づきが得られると思ったからです。国際協力は技術やアイデアが勝負ですので、多様なバックグラウンドをもつ専門家からの情報収集が欠かせません。JIFRS も IIFET も仕事に応用できるヒントが満載でとても満足しています。この夏「途上国と水産資源管理」というシンポジウムを企画しましたが、その狙いは、参加者の声を今後の業務改善に役立てることでした。日本の水産協力の強み(きめの細かい協力)を再確認できたこと、そして今の水産協力に足りないことや改善点がある程度浮き彫りになったことは、良い収穫でした。また、一般の方が水産協力をどう見ているかを知る機会にもなりました。そのなかでも、途上国の開発への貢献は当然として、もっと国益を全面に出すべきであるという、島一雄さんからのメッセージが印象的でした。途上国と日本が Win-Win の関係になるよう、これからも精進していきたいと考えています。

2. 2014年度JIFRS YAMAMOTO PRIZE の選考過程と

受賞者について

多田 稔 (国際漁業学会会長)

故山本忠先生のご寄付により授与される JIFRS YAMAMOTO PRIZE は隔年で開催される IIFET 大会の参加者予定者のうち、開発途上国を母国とする研究者を授与の対象としています。大会に先立ち IIFET 事務局を通じて論文を募集し、応募論文のうち最も優秀な 2 本を JIFRS の学会賞選考委員が選考し、受賞者には IIFET 大会において賞状と副賞としての US\$1500 が授与されます。

応募締切日までに IIFET 事務局に応募論文が 11 本投稿され、学会賞選考委員による厳正な書類審査の結果、JIFRS Yamamoto Prize に 2 名、Honorable Mention に 1 名の計 3 名を選考しました。受賞者とその論文内容は以下の通りです。

JIFRS Yamamoto 賞 :

1) Akhtaruzzaman khan 氏 (バングラデシュ)

“Capacity and Factors Affecting Capacity Utilization of Marine Fisheries: A Case of Gill-net Fkeet in the Bay Bengal”

DEA 法とトービット回帰式により刺網漁業の過剰能力を推定し、漁業の持続性を高めるためにライセンス制を導入することを提案。

2) Yugawendra Kassivisuvanathan 氏 (スリランカ)

“Present Status of Mangroves in Mandaitivu, Jaffna, Sri Lanka”

マングローブ林の適正な管理の在り方を解明し、インタビュー調査に基づいてエコ・ツーリズムと一体化した効果的なマングローブ林管理の方法を提案。

Honorable Mention :

Muhamad Suhendar 氏 (インドネシア)

“Cost Benefit Analysis of Vessel Monitoring System (VMS) in Indonesia for Managing the Transition to Sustainable and Responsible Fisheries”

コスト・ベネフィット手法を適用して現在なされているデータの非効率な利用やソフトウェアの開発が遅れていることを解明し、VMS への一層の投資の必要性を提案。

学会賞選考委員 (国際賞担当) は牧野光琢、松田恵明、八木信行、山下東子(委員長)でした。



授賞式：左は Akhtaruzzaman khan 氏、右は Muhamad Suhendar 氏、女性は IIFET 事務局長の Ann Shriver 氏
(撮影：山下東子)

3. IIFET2014 オーストラリア大会参加体験記

藤本 麻里子 (京都大学・学振特別研究員 PD)

2014年7月7日～11日の日程でIIFET2014年大会が、オーストラリアのブリスベンにて開催されました。私は漁業に関心を持つようになってまだ日が浅く、今回が初のIIFET参加であり、また英語圏での国際学会参加も初めてだったため、とても貴重な体験ができました。今夏、日本では台風やゲリラ豪雨による水害が多発しましたが、1年365日のうち300日は晴天といわれるブリスベンでは、大会期間を通して雲一つない快晴だったことに驚きました。会場となったクイーンズランド工科大学はブリスベン市のボタニカル・ガーデンに隣接しており、毎日緑の豊かな公園を散策しながら学会会場に向かうことができました。南半球への出張のため、出発前は服装に少し気を遣いましたが、日本の11月初旬頃の気温で大変過ごしやすかったです。

私はポスター発表と口頭発表にそれぞれ1件ずつエントリーしていました。ポスター発表はオープニングセレモニー翌日の実質的な大会初日に、口頭発表は最終日の午後のセッションに設定されたため、最後まで緊張感を維持しての参加となりました。ポスターセッション

は発表者が作成した電子ファイルをパネルに投影するという、私にとっては初めての形式でした。投影されるポスターが一定時間ごとに入れ替わる方式で、自分のポスターがいつ、どこに投影されるのだろうか戸惑いながらも、最終的には多くの参加者に興味を持っていただきました。

ポスター発表の形式もさることながら、口頭発表ではその発表件数の多さ、そしてその多様さにも驚きました。今大会ではスペシャルセッションと通常セッション合わせて 65 ものセッションが生まれ、口頭発表件数は約 250 件にものぼりました。毎日、複数の会場で多様なセッションが同時進行されるため、実際に聞くことができた発表は限られてしまいますが、自身の研究関心に近い発表をこれだけまとめて聞く機会に接したことは大変有意義でした。私自身は IIFET2012 年大会が開催されたタンザニアで調査を行っているため、途上国の小規模漁業や資源管理に強い関心があり、東南アジアや南米、アフリカ諸国の発表を中心にチェックしていました。アフリカ諸国からの参加者が思いのほか多く、気候変動と漁業、住民参加型資源管理、グローバリゼーションと小規模漁業などの発表に刺激を受けました。

また、私の発表にもたくさんのアフリカ出身の研究者が足を運んで下さり、質問やコメントをいただくことができました。英語が得意とは言えない私は、原稿を準備しての発表となり、質疑応答には苦戦しましたが、東アフリカ出身の研究者の方々とは、発表の前後にスワヒリ語での情報交換ができ、とても気分がほぐれました。私の調査地はタンガニカ湖およびインド洋の島嶼部ザンジバルですが、スワヒリコーストと呼ばれる、大陸のインド洋沿岸部やビクトリア湖で調査されている研究者と接点できたことも、大きな収穫でした。



ポスターセッション会場の様子（撮影：山下東子） クロージングセレモニーの様子（撮影：山下東子）

クロージングセレモニーでは、JIFRS 理事の八木信行先生（東京大学）が IIFET の Executive Committee に選出されたことが正式に発表されました。同時にダルエスサラーム大学の Paul P. Onyango 先生も Executive Committee に選出されました。2013 年に JIFRS に初めて参加、発表させていただいた際に座長を務めていただき、会場でもお世話になった八木先生と、過去に漁業とは異なる研究でお世話になったことがあるダルエスサラーム大学所属の Onyango 先生が同時に就任され、IIFET との縁を一人勝手に感じていたクロージングセレモニーでした。次回大会はスコットランドのアバディーンで開催されることが発表されました。2 年後には今回よりもさらに有意義な発表を持して、また英語力を向上させて参

加したいと感じながら帰国の途に就きました。

(IIFET2014に参加するにあたり、日本科学協会の笹川海外発表促進助成より支援を受けました。)

4. 2014年度国際漁業学会大会に参加して

小川健 (広島修道大学・経済科学部・助教)

2014年度国際漁業学会(JIFRS)大会(東京大学:8/2-3)に参加致しました。以下その報告を行います。なお私は厳密な意味では漁業の専門家ではありませんが、本学会が学会となった2011年度から参加していて、本年度で4回目となります。

8/2(土)はシンポジウム「途上国と水産資源管理」、懇親会が行われました。さすが途上国の現場で実際に導いている人たちが中心になっているだけあって、具体的な国の事例を交えて現場で支援する声が活きた、有意義なシンポジウムとなりました。

意義深い所は色々ありましたが、特に興味深かったのは、日本的な管理の方法が途上国でどういう意味で有意義となるかという点が語られている点です。日本の管理は各漁協を中心とした分権的な管理となっていますが、筆者の知る限り一定の効果はあるものの、日本が「漁業の」先進国として語られることは(少なくとも理論的には)少ないと思われます。しかし本シンポジウムにより、欧米的な漁獲枠の管理を中心とした方法(ないし組織化を中心とした方法)が余り上手く行かず、プロジェクト終了後に浸透しないのは何故か、それぞれの立場から明確になりました。その上で、(沖縄での方法などを参考にした)日本的な管理の方法、もっと言えば「日本人による」管理の方法がどういう意味で途上国の漁業管理ないし資源管理に意味を持つのか、という点が明らかとなりました。(データを持参すれば金銭的な支援がもらえるから、という事例など)データをとる重要性がなかなか浸透していないことを踏まえ、日本が地ならしをしたうえで、欧米の枠組み・金銭支援などを取り込むという順序づけた位置づけを提唱した点などは、今後の管理の在り方を考えるうえで非常に重要な点と言えます。終了後にまとめなどが出てほしい位意義深いシンポジウムであったと思われます。

2日目は個別報告と総会を中心に進みました。今回は大規模な部屋1会場のみなので、専門外の人も聞けるような収容体制です。個別報告は全12本行われましたが、さすが国際漁業学会らしく、その分析手法や目的も多岐に渡った学際的な個別報告でした。多様な統計データを基にした仮説検定あり、微分ゲームを利用した理論研究あり、消費者アンケートあり、ヒアリング調査あり、地域住民有志とのサイエンスカフェあり、制度分析あり、外国での現地調査あり、経済実験あり、そしてノルウェーの政府機関に近い所でのインタビューありと、手法によってあまり差別をしない国際漁業学会特有のよさが出ている個別報告と言えます。学問研究を中心としたものも、実学志向のものも、実態報告としてのものもあり、ここでしか聞けない多様性に富んだものとなっていました。総会では大御所から若手まで(発言者は偏っていたものの)発言が相次ぎ、決して理事会任せにしない姿勢が見られました。

この学会でしか聞けない貴重な話を踏まえ、今後の研究に役立てていきたいです。

事務局便り

1. 2014年度総会の報告

1) 2014年度 JIFRS 山本賞（国内賞）について

今年度は学会賞と奨励賞の推薦がなく、功績賞は授賞対象者が辞退されたので、受賞者なしとなりました。次年度は多数の推薦をお寄せくださいますようお願いいたします。

2) 学会誌の刊行と会費について

2013年度の学会誌の刊行が遅れていましたが、間もなく刊行の予定です。また2014年度号も原稿が集まりつつあります。2013年度号の郵送時に2014年度会費の納入票を添付いたしますので、会費の納入をお願いいたします。

3) 投稿論文の増加に向けて

学会誌ジャンルの多様化・拡大を図っていく予定です。

4) 新理事の紹介

2014年4月から昨年度総会で承認された松井隆宏（三重大学）が新理事に、2014年8月から今年度の総会での承認により大石太郎（福岡工業大学）が新理事に就任しました。

2014年度総会にて修正された2013年度会計報告および2014年度予算案は以下の【別紙1】【別紙2】に掲載しています。

2. IIFET2016の開催について

IIFET2016は2016年7月11-15日にイギリスのスコットランド・アバデーンで開催の予定です。

【別紙1】

国際漁業学会 2013年度会計決算報告

自 2013年8月1日～至 2014年7月31日

一般会計の部

(1) 収入の部

単位：円

項目	決算	備考
前年度繰越金	441,530	2011-2012年度からの繰越金
会費収入	202,000	2013年8月1日以降の入金（一般38人、学生4人）
大会参加費	80,049	2013年度大会運営利益（大会参加費・懇親会費－大会雑費・アルバイト）
雑収入	36	利子
計	723,615	

(2) 支出の部

単位：円

項目	決算	備考
通信費	7,680	短信郵送費
事務費	315	振込手数料
消耗品費		
会誌印刷費		
編集委員会費	43,081	英文校閲費
会議費	87,330	2013年度大会時の支出（招請者への謝金・交通費）
ホームページ維持費	7,220	ホームページ・サーバー代
JIFRS 山本賞口座への返済	178,420	
その他		
小計	324,046	
次期繰越金	399,569	銀行 236,903+郵貯 156,638+キャッシュ 6,028
計	723,615	

山本忠賞基金会計決算報告

自 2013年8月1日～至 2014年7月31日

(1) 収入の部

単位：円

項目	決算
前年度繰越金	1,204,540
一般会計より返済	178,420
利子	195
計	1,383,155

(2) 支出の部

単位：円

項目	決算	備考
山本賞（JIFRS 会員）	20,000	2013年度（2人）
山本賞（IIFET2014）	314,766	1,500US\$*2人
次期繰越金	1,048,389	銀行 1,045,043 +キャッシュ 3,346
計	1,383,155	

以上の通り決算報告いたします。

2014年7月29日 国際漁業学会 会長 多田 稔 印

国際漁業学会 事務局長 有路 昌彦 印

監査の結果、上記決算報告書は適正であると認めます。2014年7月31日 国際漁業学会 監査 榎 彰徳 印

【別紙2】

国際漁業学会 2014年度会計予算案

自2014年8月1日～至2015年7月31日

(1) 収入の部

単位：円

項目	予算	備考
前年度繰越金	399,569	
会費収入	200,000	
書籍等販売収入	0	
大会参加費	38,030	2014年度大会運営利益(大会参加費・懇親会費-大会雑費・アルバイト) [費目：立て看板 43,200、アルバイト 35,000]
雑収入	0	
計	637,599	

(2) 支出の部

単位：円

項目	予算	備考
通信費	40,000	会誌発送郵送料(2013年度学会誌の今年度内郵送料)
事務費	2,000	振込手数料
消耗品費	10,000	用紙、コピー、トナー、封筒等
会誌印刷費	450,000	「国際漁業研究」第12巻(2013年度刊行予定)(170部)、 第13巻(2014年度170部)、英文誌第13号(100部)
編集委員会費	40,000	英文校閲費
会議費		
ホームページ維持費	7,220	ホームページ・サーバー
その他	0	
小計	549,200	
予備費	88,379	
計	637,599	

会費：一般個人会費 5,000円
 院生・学生会費 3,000円
 賛助会費(個人・団体) 1口10,000円 (団体は3口以上)

山本忠賞基金会計予算(案)

自2014年8月1日～至2015年7月31日

(1) 収入の部

単位：円

項目	決算
前年度繰越金	1,048,389
利子	0
計	1,048,389

(2) 支出の部

単位：円

項目	決算	備考
JIFRS YAMAMOTO 賞 (国際賞)	0	
山本賞(国内賞)	40,000	2015年度大会用
世界水産会議寄付	0	
賞状・送料	5,000	
IIFET 関連		
次期繰越金	1,003,389	
計	1,048,389	